

A. F. Lueder の統計学批判について

松 川 七 郎

I

August Ferdinand Lueder(1760—1819)は 18 世紀末から 19 世紀初にかけてのドイツ(プロイセン)で活動した経済学者・統計学者である。下掲の書目¹⁾からもうかがわれるように、Lueder の研究領域は哲学・歴史学・政治学・地理学・人種学

1) 翻訳書をもふくめた Lueder の全公刊編著作をその公刊年次順に掲げればつぎのとおり。*印の諸文献は筆者が手にしえなかったもの。本稿でこれらの編著作に言及するときは各々の番号で示すことにする。

* I) Historisches Portefeuille, zur Kenntniss der gegenwärtigen und vergangenen Zeiten von K. R. Hansen und A. F. Lueder. 1—7. Jahrg. Frankfurt a. d. O., 1782—88. (Periodische Schriften)

* II) Holländische Staatsanzeigen...herausgegeben von Jacobi und Lüder, mit einem Vorberichte von A. L. Schlözer. 6 Tle. Göttingen, 1784—86. (Periodische Schriften)

* III) Über den gegenwärtigen Zustand der Kolonie am Vorgebürge der guten Hoffnung, verglichen mit ihrem ursprünglichen. Aus dem Französischen mit Anmerkungen von A. F. Lueder. Göttingen, 1786. (Übersetzung)

IV) Geschichte des holländischen Handels. Nach Luzacs Hollands Rykdom bearbeitet von August Ferdinand Lüder, ordentl. Professor der Geschichte und Statistik am Herzoglichen Collegio Karolino in Braunschweig. Leipzig, 1788.

* V) Charaktere und Anekdoten vom schwedischen Hofe. Aus dem Englischen, mit Anmerkungen vom Professor Lueder. Braunschweig, 1790. (Übersetzung)

* VI) Statistische Beschreibung der Besitzungen der Holländer in Amerika. 1. Tl. Braunschweig, 1792.

* VII) Einleitung in die Staatenkunde nebst einer Statistik der vornehmsten europäischen Reiche. 1. Tl. Leipzig, 1792.

* VIII) J. Meerman...Reise durch Preußen, Österreich, Sicilien, und einige an jene Monarchien grenzende Länder. Aus dem Holländischen übersetzt vom Professor Lueder. 2 Tle. Braunschweig, 1794. (Übersetzungen)

* IX) Materialien zur Statistik. 1. Hft. Göttingen, 1794.

* X) J. S. Stavorinus...Reise nach dem Vorgebürge der guten Hoffnung, Java, und Bengalen, in den Jahren 1768 bis 1771, ans dem Holländischen frey übersetzt und mit Anmerkungen begleitet,

にもおよんでいたが、かれが従来比較的多くの注目をひいてきたのは経済学・統計学の分野においてであった。そしてこのばあい、経済学者としての Lueder は、哲学者の Ch. Garve, 歴史家の G. Sartorius, 経済学者の Ch. J. Kraus などとともに、A. Smith の自由主義思想や経済学説のドイツ von Professor Lueder. Berlin, 1796. (Übersetzung)

* XI) Geschichte der vornehmsten Völker der alten Welt im Grundrisse. Braunschweig, 1800.

XII) Ueber Nationalindustrie und Staatswirthschaft. Nach Adam Smith bearbeitet von August Ferdinand Lueder, Herzoglich Braunschweigischem Hofrathe und Professor der Geschichte und Staatskunde am Collegio Carolino in Braunschweig. 3 Tle. Berlin, 1800—04.

* XIII) Repositorium[od. Repertorium]für die Geschichte, Politik und Staatenkunde. I. 1—3. II. 1. 8. Berlin, 1801—05.

XIV) Die National=Industrie und ihre Wirkungen. Ein Grundriß zu Vorlesungen vom Hofrath Lueder in Braunschweig. Braunschweig, 1808.

* XV) Über die Veredlung der Menschen besonders der Juden durch die Regierung. Nebst einem Sendschreiben an den Verfasser der Bemerkungen über des Hrn. Geheimen Finanzrath's Jacobson Vorstellung an den Fürsten Primas. Braunschweig, 1808.

* XVI) Über die Kultur und Industrie der Portugiesen. Berlin, 1809.

* XVII) Leitfaden der alten Geschichte, zu Vorlesungen. Braunschweig, 1810.

* XVIII) Entwicklung der Veränderung des menschlichen Geschlechts. Braunschweig, 1810.

XIX) Kritik der Statistik und Politik, nebst einer Begründung der politischen Philosophie vom Professor Lueder in Göttingen. Göttingen, 1812. 高野岩三郎訳『統計学批判』(統計学古典選集第1巻) 1941年。

XX) Kritische Geschichte der Statistik. Von August Ferdinand Lueder, Herzoglich Braunschweig=Lüneburgischem Hofrathe und Professor der Philosophie in Jena. Göttingen, 1817.

XLI) August Ferdinand Lueder's, Herzoglich Braunschweig=Lüneburgischen Hofraths, Kanonikus des Cyrak=Stiftes in Braunschweig und Professor der Philosophie in Jena, National=Oekonomie oder: Volkswirtschaftslehre. Ein Handbuch zur Beförderung des Selbststudiums dieser Wissenschaft. Nach dem Tode des Verfassers aus dessen hinterlassenen Papieren herausgegeben. Jena, 1820.

ツへの流入の初期の段階における導入者の1人として評価され、またドイツ統計学=国状学派の最後の統計学者の1人としてのLuederは、ほかならぬこの学派の統計学に絶望したばかりではなく、当代のあらゆる学派の統計学を全面的に否定した人として一般的に評価されているのである。近代統計学史に占めるLuederの地位は、この点でまったく特異だといえよう。

後述するように、Luederが当代の統計学を批判しこれを否定したのは、その主著『統計学および政治学批判』(XIX)においてであって、それは1812年のことであった。この時期のプロイセン社会は、イギリス産業革命やフランス革命によって、またとりわけNapoleon戦争による惨怛たる敗北(1806年)のために、きわめて深刻な打撃をこうむっていたのである。それは全欧におけるNapoleonの極盛期であって、Luederの統計学批判=否定は、この敗北を契機としてとりわけはげしく闘わされた統計学論争(1806—11年)に対するかれ自身の結論であった。しかもかれ自身としては、統計学を「再建もせずただぶちこわす」意図は毛頭なかったのである(XIX, Vorrede)。

ところで、Luederの批判=否定などにはかわりなく、かれ以後の統計学がL. A. J. Quetelet, K. Knies, A. Wagnerなどによって体系づけられ、その諸成果が近代統計学の確立として評価されているのは周知のとおりである。したがって、統計学史の流れから見れば、Luederの統計学批判=否定は、統計学史書が一致して述べているように、一時的現象にすぎないだろうし、また事実それは19世紀初頭のプロイセン社会が当面した大激動によって生れた一時的混乱にちがいない。が、この問題をただこういいきってしまうこともできないであろう。というのは、はなはだしい誇張や激越な語調の多いLuederの立言からこれらのゆきすぎを除去して見ると、またそれをSmithの導入者としてこの大激動期に生きたLuederの経済学上の諸見解と関連づけて考えると、そこにはいっそう基礎的な問題が提起されているように考えられるからである。本稿はこういう問題に接近することを目的とする文字どおりの試論である。

II

Luederの生涯はわずかしか伝えられていないが、そのかぎりでは判断すれば、かれの本領は学者にあったと考えてさしつかえなからう²⁾。そして経済学者・統計学者としてのLuederがここでのおもな問題なのであるから、そこに焦点をあわせてかれの学問的成長をまずはじめにたどりたい。

Luederが生れたのはWestfalenのBielefeldという小さいマニユファクチュア都市である。かれが生れた1760年は、7年戦争の最中で、露・墺軍によってBerlinが陥落したのもこの年である。が、Luederの青年時代は総じてプロイセンの隆盛期であった。というのは、それはFriedrich大王の治世の後半に相当するが、この時代のプロイセンは、1763年のHubertusburg条約以降、「専制政治・官僚制度・封建制度の混合物的支配」を強固にし、特異な「啓蒙的絶対主義」のもとに軍事警察的国家機構をきずきあげ³⁾、ヨーロッパにおける最強国の1つになったからである。そしてこういう時代に、LuederがHannoverのGöttingen大学で学んだということは、かれの学問的成長を理解するうえにきわめて重要である。そのわけは、プロイセンの中央に位し、当時イギリス国王の領土であったHannoverは、早くからイギリスの進歩的諸思想の影響をうけていたのであるが、1737年にそこに創立されたGöttingen大学は、もとより制約された意味においてはあれ、「科学の理想郷」⁴⁾とさえいわれるほど、進歩したもっとも有力な新大学だったからである⁵⁾。この大学が、後期官房学の1分科としてG. Achenwallが確立した統計学=国状学の本拠であると

2) 上掲の諸文献(XII, XXI)の表題にも記されているように、かれは宮中顧問官や司教座聖堂参事会員の職についていたこともあったが、これらはいずれも単なる称号にすぎぬものだったようである。

3) W. W. Birjukowitsch, B. F. Porschnew, S. D. Skaskin, *Geschichte der Neuzeit, 1640—1789*. Berlin, 1954, SS. 277—78, 280.

4) M. Ornstein, *The rôle of scientific societies in the seventeenth century*. Chicago, 1938, p. 259.

5) *Ibid.*, p. 259. C. W. Hasek, *The introduction of Adam Smith's doctrines into Germany*. New York, 1925, pp. 60—61.

同時に、どの大学にもさきがけて Smith の思想や学説が流入したその門戸になったのもこのためにほかならない⁶⁾。

後年 Lueder は、自分の若き日は国状学と政治学の研究にささげられたとあったが(XIX, Vorrede), 後年の統計学者としてのかれは、Göttingen 大学に学んだということによって運命づけられたと考えてさしつかえなからう。そして国状学・歴史学をはじめ広汎な学問分野へのかれの興味を刺激したのが Achenwall の直接の講座後継者で代表的な国状学者・歴史家の A. L. von Schlözer であり、かれにとっては Schlözer が「永久に忘れがたい師」(IV, Vorrede)でもあったということは、統計学者としてのかれが系譜的には Achenwall 以来の正統的な国状学者であったことを示すものといえよう。またこれを前掲の書目について見ても、(I), (II)の定期刊行物や(VI), (VII), (IX), (XIII)などが国状学やその素材に関するものであることは疑いない。とはいえ、Lueder の国状学が Achenwall=Schlözer のそれをどう発展させていたかということは明らかではない。けれども、(IV)の巻末に相当豊富な経済統計表が付加されていることから考えると、Lueder の国状学が社会経済現象の数量的観察にも現実に十分関心を払っていたということが知られる。しかも、(III), (V), (VIII), (X)などの翻訳書が示すように、かれが青年時代から広い意味での地理学や旅行記にも興味をもっていたのは注目に値する。というのは、Achenwall 以後のプロイセンにおける統計学は、主として J. P. Süßmilch によって導入されたイギリス政治算術ばかりではなく、A. F. Büsching をその代表的人物とする地理学からも影響を受け、「表派統計学」や「比較統計学」として、しだいに社会経済現象の数量的観察・比較を重視するようになるのであるが、地理学に対する Lueder の関心は、プロイセンの統計学界が

歩いていた道をかれ自身もまた歩きつつあったことを示すものだからである⁷⁾。以上に述べたかぎりにおいて、統計学者としての Lueder は、伝統的な国状学の本流にたちつつ、しかも同時に Süßmilch=Büsching 流の新しい統計学(総じて政治算術)の方法を事実上容認し採用もしていたような、過渡的な性格の学者であったといえよう。

ところで、Smith の『諸国民の富』(1776年)は、早くもその公刊の年に、ロンドン在住の J. F. Schiller によって独訳され、その第1巻は1776年、第2巻は1778年に Leipzig で出版されたのであるが、独訳の第1巻はすでに1777年に Göttingen 大学の哲学教授 J. G. H. Feder により、権威ある学界通信(*Göttingische Gelehrte Anzeigen*)の誌上に3回にわたってくわしく紹介され、好意的な評価をうけた⁸⁾。これ以外に、Ch. F. Nicolai や I. Iselin のような哲学者たちも、Smith のこの主著を紹介したが(1777~79年)、1793年に Sartorius がこれを書評し、1794年に Garve が第2の独訳を出版するまでの約20年間、プロイセンでは Smith はほとんど注目されなかった。というのも、Friedrich 大王の治下においては官房学が全盛をきわめ、フランス革命の勃発によって開始された社会経済的变化も、すくなくともその当初においては、官房学の独断論のねむりからプロイセンの学界をよびおこすには不十分だったからである⁹⁾。

いつごろから Lueder が『諸国民の富』に接していたのかは不詳であるが、おそくも Göttingen 大学を卒業してまもないころ、すでにかれがこの書物を読んでいたことはたしかである。というのは、1788年に出版した前述の『オランダ商業史』(IV)のなかで、かれは『諸国民の富』を引用し、

7) Leser は、Lueder の初期の著作はとりわけ „geographisch-statistisch“ な内容のものが多いいうことを指摘しているが(*Allgemeine Deutsche Biographie*. XIX. Bd.), それは Lueder にかぎらず 18 世紀中葉以後のプロイセンの統計学が全体として歩いた 1 つの道なのである。Cf. V. John, *Geschichte der Statistik*. Stuttgart, 1884, SS. 88—95. 足利末男訳『統計学史』93—100 ページ。

8) Treue, *op. cit.*, S. 103. Hasek, *op. cit.*, pp. 63, 65.

9) Hasek, *op. cit.*, pp. 65—67.

6) W. Treue, *Adam Smith in Deutschland. Zum Problem des „Politischen Professors“ zwischen 1776 und 1810*, SS. 102—03. (*Deutschland und Europa. Historische Studien zur Völker- und Staatenordnung des Abendlandes*. Düsseldorf, 1951.)

この書物を「不朽の著作」(IV, 617)だといっているからである¹⁰⁾。したがってLuederは, Schlözerについて歴史学や統計学=国状学を学んだのといわば平行して, Smithにも学んでいたといえよう。とはいえ, かれがSmithの学徒としてのみずからを決定的にしたのは, その12年後の1800—04年に出版した3巻の大著『国民産業と国家経済』(XII)によってである¹¹⁾。そして経済学分野におけるLuederの代表的著といわれるこの書物は, Smithの諸原理を„ausarbeiten“したというSartoriusの『国家経済概論』(*Handbuch der Staatswirtschaft*. Berlin, 1796)につづくものであり, プロイセンにおける第2のSmith解説書にほかならなかったのである。

この書物において, Luederは, 「先行者(Smith)の道を追い」ながら, その「あらゆる主張を再検討し, 欠陥を補足し, 誤謬を訂正し, …〔ばあいによっては〕最重要部分をも」書きあらためたのであるが(XII, Vorrede), かれ自身の窮極の目的は, 諸国民の歴史的進歩の原動力を明らかにすることであって, それをかれは人間の労働においてみいだしたのである(XII, Einleitung)¹²⁾。ところで, この書物を全体として見ると, 1部分は『諸国民の富』の単なるパラフレーズであると同時に, 1部分はかれ自身の経済学的見解の体系化の試みだといわれている¹³⁾。換言すれば, かれは一方においてSmithの経済学上の諸理論をそのまま借用しつつ, 他方において各国の自然的諸条件が経済発展におよぼす影響・国家の目的と国家

10) Luederが引用しているのは, Smithが第4版(1786年版)で加筆したというAmsterdam銀行の沿革(第4編第3章第1節の「余論」)である。なおLeserは, LuederがSmithの経済学に接したのは, 同時代の外国文献の広汎な渉猟の結果だろうといっている。*Allgemeine Deutsche Biographie*. XIX. Bd.

11) この3巻の大著を圧縮し, それを「講義要綱」の形で出版したのが1808年の『国民産業とその作用』(XIV)である。

12) この点は, Luederがドイツにおける唯物論的歴史観の先駆者の1人として評価される根拠の1つである。Cf. W. Sulzbach, *Die Anfänge der materialistischen Geschichtsauffassung*. Karlsruhe i. B., 1911, SS. 46—48.

13) Hasek, *op. cit.*, pp. 79—80.

経済・統治制度・法律・軍備・文化・財政を論じた。そしてこの後者の部分をつうじて, I. Kant, Smithおよびフランス革命に強く影響された国家観および自由主義思想を展開したのであって¹⁴⁾, 以上に要約した諸点は, とりもなおさずSmithの導入者としてのLuederの特徴にほかならない。

したがって, この書物を公刊した当時のLuederは, 絶対主義国家の忠順な従僕の養成をその使命とする大学教授の旧套を脱して, すでに英・仏の進歩的諸思想の摂取と消化に努力し, それによって後進をみちびき, 新しいドイツ的なものを生みだそうとしていた経済学者・統計学者であり, また以上の意味において特徴づけられる„politische Professoren“¹⁵⁾の1人だったといえよう。

III

Luederがこのように特徴づけられる経済学者・統計学者になったとき, その祖国は, Napoleon戦争にまきこまれ, 1806年10月のJenaおよびAuerstedtの敗戦によって完全にNapoleonに屈服し, 神聖ローマ帝国も崩壊した。そしてNapoleonの支配下にフランスの属領に等しいライン連邦がプロイセンの旧領土の過半を擁する地域に成立し(1806年), またその支配下に封建プロイセンの改革——„politische Professoren“の弟子であるK. SteinやK. A. Hardenbergの諸改革(1807—11年)——がおこなわれた。つまりこの時期のプロイセンは, Napoleonの支配から自己を解放して民族的統一と独立とをかちえるとともに, 絶対主義の軍事警察的支配を克服して市民社会を実現するという困難きわまる課題をうけとったのであって, しかもこの後者の課題を, 支配者Napoleonの助けをかりてはじめてある程度解決しなければならなかったほど, プロイセン社会における市民階層は弱体だったのである。

14) *Ibid.*, pp. 81—82. J. Grünfeld, *Die leitenden sozial- und wirtschaftsphilosophischen Ideen in der deutschen Nationalökonomie und die Ueberwindung des Smithianismus bis auf Mohl und Hermann*. Wien, 1913, SS. 32—37. Luederが『人類の向上』(XV)を主張し, ユダヤ人や奴隷の解放をとらえたのもこのあらわれである。

15) Treue, *op. cit.*, S. 107.

ところで、このような事態は、プロイセンの「過去のあらゆる世代の誰れ1人として体験しなかったほど大きく、震撼的で、影響するところ深刻な政治的変革」(XIX, Vorrede)にちがいがなかったし、とりわけ国状や国力の正確な認識や測定を使命としていた統計学者にとっては、国状学派(旧学派)であると政治算術学派(新学派)であるとを問わず、とうてい予想しえなかった衝撃であった。そしてこののびきならない事態に直面したとき、統計学の新旧両学派のあいだには、この学問の対象・方法に関してはげしい論争が闘わされた。

統計学史上著名なこの論争が頂点に達したのは、征服者 Napoleon が「事物の予算」(“budget des choses”)として近代統計を重視し¹⁶⁾、その結果「Napoleon の極盛期にかれの第1級の補助者たちによって[プロイセンの]統計が最高度に完成された」(XX, Vorrede)時期においてであるが、論争自体は、実質的にはかなりまえからおこなわれていた。それは Achenwall の時代にさかのぼると考えられるのであって、社会経済現象の数量的観察およびそれにもとづく諸現象の比較が新たに統計学の分野に導入されつつあったとき、国状学の信奉者が1752年に上述の「表派統計学」に加えたはげしい攻撃にはじまるとさえいわれているのである¹⁷⁾。Achenwall の国状学は、国家の福祉に顕著な影響をおよぼす諸事実や諸事項を政治・経済・社会・文化の全面にわたり、「土地および人民」をその総括的基本概念としつつ、ことばを用いて正確に記述し、これによって国家の現状を明らかにし、絶対主義国家の基本政策の確立に寄与することを目的としていた。そしていうところの「国家顕著事項」は、国家生活の全面におよぶものであり、そのなかには性質上数量的にはとうてい観察しえないがしかしきわめて重要な諸「事項」——総じて精神的文化的諸「事項」——がふくまれているのである。ところが、新たに導入さ

れた統計学は数量的に把握しうる社会経済的諸現象のみを対象とするがゆえに、国情学の見地からすればそれは「魂のない」形骸だと考えられたのである。そして18世紀後半をつうじて微弱ながらも進行した資本主義的社会関係の成長は、社会経済現象の数量的観察の可能性を増大させ、総じて政治算術派とよばれた新学派の社会的基盤をゆたかにし、それと市民階層との結合を緊密にした。しかもこのことは絶対主義国家の官許の学問としての国状学との対立をはげしくするばかりではなく、絶対主義国家そのものの存在を危うくするものであった。統計学の新旧両学派の論争がプロイセンの絶対主義の破局と空前の社会的混乱のなかでその頂点に達したのも偶然ではない。

この論争の内容は、1812年に公刊された Lueder の統計学上の主著『統計学および政治学批判』(XIX)のなかに要約されている。Lueder は1806年以来ライン連邦の学都となっていた Göttingen の大学の哲学および歴史学教授(1810年に就任)としてこの主著を執筆したのであるが、それは新旧両学派の統計学を批判し、「新建築の土台をすえる」(XIX, Vorrede)ことを目的とするものであった。ところで、この書物の「統計学の歴史」という章(XIX, §§. 7—23)が Lueder によるこの論争の要約なのであって、それは1806—11年を中心とする簡潔な論争史だと考えてさしつかえなからう。Lueder の要約はかならずしも整然とはしていないが、まずはじめに、新学派に対する旧学派の批判の主要な論点をあげてみよう。1) 新学派(政治算術学派)は、土地面積・人口・人口密度・国民所得・家畜頭数等々のような、計量し計算しうる「物質的なもの」を知りさえすれば国力が知悉できると妄想しているが、2) 国力とは国家制度・外交原則・国民精神・自由愛・天才等々、より多く精神的道徳的な、計量し計算しえないものであり、3) したがってこれらの事項を対象とする統計学は新学派が考える以上に高尚な学問である。が、4) 計量や計算を全部的に排除することも不可であるから、5) われわれは、「表の奴隷」や「数字屋」になりさがっている新学派に、感覚のそとにあるものや内面的なものこそが重要だと

16) John, *op. cit.*, S. 150. 前掲邦訳書 155 ページ。

17) H. H. Solf, *Gottfried Achenwall. Sein Leben und sein Werk, ein Beitrag zur Göttinger Gelehrten-geschichte*. Forchheim (Oberfranken), 1938, SS. 45—46.

いうことを教え、統計学を「魂のないこしらえもの」の状態から救うべきだ、と。その反面、旧学派に対する新学派の反批判の主要な論点はずきのとおりであった。すなわち、1) 旧学派は統計的方法を理解せずにわれわれを非難し、しかもわれわれを全部的には排除しえない。2) 統計表の効用は大であり、それをもたぬ統治者は考えられない。3) そして旧学派のいう精神的な・感覚のそとにある・内面的な諸事項を評価するばあいには、誤りはさらに大となるであろう。4) それに、旧学派は「少数の貴族が快適に統治し」、統計的データが秘匿されているような国々において勢力を占めているにすぎないではないか、と。

Lueder は、このような論争は新旧両学派がともにあわれむべき状態にあることを示すものだといっているが(XIX, §. 22)、この論争の意味を考えるまえに、Lueder 自身の見解を述べよう。

IV

19世紀初頭の統計学論争を以上のように述べたのち、Lueder は、統計学の目的(研究対象)をこの論争からひきだし(第3章)、新旧両学派の統計学を批判し(第4章)、統計学への期待を述べるのであるが(第5章)、こういう構成自体、この書物が実質的には上述の論争に対するかれ自身の結論だということを示すものにほかならない。

ところでLueder は、新旧両学派のみならず英・仏の統計学界にも共通して承認されているところの、「国家の現状(国家の諸力と国民の福祉)」を統計学の研究対象とし、統計学はこれを明らかにし、国家がいかにあるべきかを教える政治学に材料を提供すべきだと規定している。こういう規定は明らかに国状学の伝統にたつものといえよう。この規定をふまえながら、かれは新旧両学派の統計的諸方法を批判するのであるが、それを極言すれば、上述の論争のくりかえしにすぎず、かれは新学派を批判するばあいには旧学派の立場にたち、旧学派を批判するばあいには新学派の立場にたつのである。統一的な観点の欠如は研究対象の規定の抽象的・形式的性格と表裏しているというべきであろう。とはいえ、Lueder が上述の諸論点につけ加えたものもなしとしない。新学派批判につ

いていえば、かれが新学派による死亡率の法則性の発見を高く評価していること、また新学派が当代の政治家と結託して統計を歪曲しているのをはげしく非難していること(これは Napoleon 支配のもとにおける統計調査の奨励とむすびついた問題である)、の2点があげられる。その反面、Lueder は旧学派がなんの業績をものこしえなかったことを手きびしく非難し、新学派を徹底的に批判したのは、旧学派ではなくて「われわれの時代の大動揺」そのものなのだといっているのである。

最後に、Lueder は新旧両学派の統計学に対する期待を検討する。このばあい、かれは真の国力の測定ほど人を誤謬にみちびきやすいものはない、という Bacon のことばをひきあいにだしながら、まず新学派に対する期待を検討する。そしてここでの問題は、人民の幸福とか、国土面積・人口・国民所得・労働賃銀・商品生産高等々が果して計測可能かどうか、またたとえ可能だとしても、それだけでなにが語れるか、ということである。Lueder は、これらの概念の実体が無限の多様性をふくみ、したがってまたその規定もいちじるしく混乱していることを指摘し、一義的に計量することは今後とも不可能だとする。その反面、旧学派はどうかといえ、かれらが強調する精神的なるものを明らかにするためには、人間の道徳的・宗教的・政治的・生理的等々いっさいの性質が探究されなければならない、しかもいちじるしく多くの階層に分化している人間について探究されなければならない。これは全知者にしてはじめて可能なことで、旧学派などに期待することは全然できない、と。このように、Lueder は新旧両学派に絶望し、統計学そのものを全面的に否定するのであるが¹⁸⁾、それは両学派がともに「解決不能な課題を解決し」ようとした結果だとかれは考える。そうとすれば、統計学にとって解決可能な課題はなんであろうか。Lueder は、これに対し、上述の研究対象以外、すくなくともあらわな形では答えておらず、したがって上述の「新建築の土台」が

18) この否定は、1817年に出版された Lueder の統計学上のもう1つの主著『批判的統計学史』(XX)においてさらに徹底したものになっている。

すえられているとは考えられないのである。

以上のような Lueder の統計学批判 = 否定は、従来さまざまに解釈されてきた。たとえば、Leser は Lueder の否定の根底には Smith の自由主義思想がある——かれは、統計調査をつうじて国家が個人の社会生活に介入することを拒否したのだ、という¹⁹⁾。また Leser とならんで Pribram は、Lueder は Napoleon 支配のもとにおける統計万能論をいましめ、統計数値が限界をもつことを明らかにしたといい²⁰⁾、Ingram は、Lueder の否定は統計が政治の道具になることに対する警告だといっている²¹⁾。さらに Tyszka は、Lueder が否定したのは〔結果的には〕国状学であって、これによって新学派はかえって前進したといっている²²⁾。

このような意味づけを筆者はいずれも妥当だと考える。と同時に、筆者は、Lueder の統計学批判 = 否定の意味は、以上の諸点だけにつきるものでもないように思う。筆者の研究の現状では漠然と問題を指摘する程度にとどまらざるをえないが、それは、上述の統計学論争から Lueder の統計学否定までの過程を、Smith の導入者としての Lueder の経済学上の諸見解と関連させながら、激動期のプロイセン社会のなかで考えなおすばあいについて明瞭になるであろう問題である。

Lueder の統計学上の諸見解のなかに新旧両学派のそれが不統一のままに混在していることは明白である。そしてかれが「啓蒙的」絶対主義のイデオログとしての旧学派に同調しながら、社会経済現象をただ計量し計算し羅列することだけで能事おわれりとしていた新学派を批判したことは、それ自体まったく正当である。しかしながら、そのさいかれが強調したものは、精神的なもの、眼に見えぬ内面的なもの等々というあまりにも観念的なものであった。このことは Smith の経済学

上の基本的諸理論の導入者としての Lueder を考えるばあい一見いかにもふしぎである。その反面、Lueder が新興市民階層のイデオログとしての新学派に同調しながら、旧学派の観念的な弱点をついたことはたしかに適切である。が、新学派の政治算術は、社会経済現象を主として価格関係においてのみ観察し、この点で創始期のイギリス政治算術にさえ遠くおよばなかった。しかも Lueder は、イギリス政治算術の発展としての Smith の経済学上の基本的諸理論を導入しながらも、このばあいにはプロイセン社会における「無限の多様性」と、それを反映する経済学的諸概念のいちじるしい混乱とに眩惑され、Smith の諸理論を身をもって統一的に理解できなかつたのである。その死の翌年に出版された『国民経済学』(XXI)のなかで、Lueder が Smith の価値論を誤りだとして批判し(XXI, 9. Kap.)、商品価値の主観性を強調していることを考えあわせるといつそうこの感がふかい²³⁾。Hasek が指摘しているように、けっきょく Lueder は、激変期のプロイセン社会に自己の諸見解を適応させえなかつた人ということになるかも知れない²⁴⁾。そしてかれの統計学上の主著がこの学問そのものを否定する結果になったことはまさに悲劇的である。が、この否定のなかに実質的に提起されている問題——Smith の経済学上の諸理論と社会経済現象の統計的観察とをどのように関連させるかという問題——は、実は近代統計学を体系づけたという Quetelet や Wagner においてもなお解かれなかつた問題なのである。そればかりではなく、より一般的な形にひきなおせば、これは現に未解決な点を数多くふくむ基礎的な問題だ、といわなければならないのである。

23) Roscher は、Lueder は死後に出版された『国民経済学』においてもほとんど全面的に Smith の立場にたっていた、といっているがこれは誤りであろう。Napoleon 戦争以後の Lueder はそれ以前にくらべて Smith からしだいに遠ざかったというべきであらう。Cf. W. Roscher, *Die Ein- und Durchführung des Adam Smith'schen Systems in Deutschland*, S. 39. (Sächsische Gesellschaft der Wissenschaft, Leipzig, *Berichte über die Verhandlungen, philologisch-historische Klasse*. Bd. XIX. 1867.)

24) Hasek, *op. cit.*, p. 84.

19) *Allgemeine Deutsche Biographie*. XIX. Bd. Hasek, *op. cit.*, pp. 82—83.

20) *Allgemeine Deutsche Biographie*. XIX. Bd. Seligman's *Encyclopaedia*. ed. 1937. Vol. IX.

21) *Palgrave's Dictionary*. ed. 1900. Vol. II. Seligman's *Encyclopaedia*. ed. 1937. Vol. IX.

22) C. von Tyszka, *Statistik*. Teil I. Jena, 1924, S. 92.